

巻頭言 「遠い姿」

宇野 元

1986年、ひと夏をカナダとアメリカで過ごしました。教会会議の陪席と研修会への参加が目的でしたが、それらが終わると、神学生の気楽な身だった私は、各地を巡る旅を楽しみました。ペンシルベニア州に滞在中、旅全体の世話をしてくれていた人が、このあたりで行きたい所があるかと尋ねてくれました。厚かましい青年は、ワイエスに会いたい、と答えました。ワイエス？ そう、有名な画家のワイエスです。ああ、そう…… するとどういう手段を用いたのか、すぐ連絡をとってくれました。この時期、彼は島ですごすので会えないが、彼と彼の家族の作品を集めた美術館があるから、そちらに行こう。夢のようでした。「荒廃するアメリカ」と呼ばれた時代の、老朽化しあちこち雑草がはびこる高速道路を2時間、美しい館のような美術館に着くと、親切な館長が日本からきた若いワイエスファンを案内してくれました。そこで買った小さな複製の絵が牧師館の居間に掛かっています。



古い時代の写真のような絵。観る者が画面中央の人影と出会う構図になっていて、冬の日、玄関を出たときの冷たい外気、降る雪を感じます。人影は女性で、あとで画家の妻であることを知りました。こちらを向いて立ち、近くにいるのに遠い、そんな不思議な味わいがあります。

私たちの「存在」は謎めいています。親しく向かい合い、言葉を交わしていても、遥かでもある。自分自身さえ、とても不確かに思えます。ちょうどこの絵のように、白い所に立っているかのよう。そうして、白い世界に消えてしまうかのよう。そんな私たちに贈られている恵みを思い致して感謝します。私たちの人生と、私たちの世界にたいする神の顧みを証しするものとして、イエス・キリストの苦難と死と復活が告げられています。多くのことが疑わしく思えるときにも、動かないものとして。あなたと、わたしを、安心してゆだねられる拠り所として。